

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9 （共通）

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 6 年 6 月 1 1 日現在

機関番号：30122

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K19649

研究課題名（和文）原爆傷害調査委員会が実施した遺伝学調査における助産婦の活動

研究課題名（英文）Midwives Activities in Genetic Studies Conducted by the Atomic Bomb Casualty Commission

研究代表者

船木 沙織（大竹沙織）（Funaki, Saori）

天使大学・看護栄養学部・講師

研究者番号：00714396

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は原爆障害調査委員会が実施した遺伝学調査におけるABCCと助産婦の連携の実際、妊産婦と新生児およびその家族に対する活動の実際を明らかにすることを目的とした。ABCC科学者と助産婦は日常的に接触し、遺伝学調査の目的や内容について議論を重ねた。占領期においても助産婦はABCC科学者に対等な立場で提言し、調査を受ける母親や家族の気持ちを代弁する役割があったと考える。遺伝学調査は助産婦の出産報告書が必要不可欠であり、ABCC科学者は助産婦が意見を述べやすい体制づくりを心掛けていたことが示唆された。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はABCCの遺伝学調査における助産婦の活動という特殊な体験を研究対象としているが、その経験は今後の放射線被曝者医療における継続的な看護支援の構築に繋がる意義があると考えられる。また、占領期に設立されたABCCという特殊な環境の中で被曝者の看護支援を行った助産婦の体験は貴重なものであり、記録しておくべき有益なものである。

研究成果の概要（英文）： This study aimed to determine the extent of the collaboration between the Atomic Bomb Casualty Commission (ABCC) and midwives in genetic studies conducted by the ABCC, as well as midwives' activities related to pregnant women, postpartum mothers, newborns, and their families. The ABCC scientists and midwives were in daily contact and discussed the purpose and content of the genetic studies. Even during the Occupation, midwives made recommendations as equals to the ABCC scientists and communicated the feelings of the mothers and families being investigated. Results suggest that midwives' birth reports were essential to the genetic studies and that the ABCC scientists tried to create a system that made it easy for midwives to express their opinions.

研究分野：母性看護学

キーワード：原爆傷害調査委員会（ABCC） 遺伝学調査 助産婦

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1．研究開始当初の背景

原爆傷害調査委員会（以下 ABCC）は、広島、長崎に原爆が投下された以後、原爆による放射線の健康影響について長期的に調査を行った米国の調査研究機関である。ABCC に関する研究はこれまで、その設立の経緯に関する研究（笹本, 1995）、ABCC の研究調査の歴史的検討（Lindee, 1994）などが行われてきた。被爆者と関わっていた ABCC 医療職の活動に関する研究は、被爆者と健康診査の調整をする連絡員の証言（木永・長崎女性史研究会, 2012）からその活動の一旦を把握することができた。しかし、医師や看護職など ABCC の医療職の活動の実際を明らかにした研究は著者が調べた限りでは発見できなかった。このため申請者は、ABCC の医療職の活動の実際を明らかにする前段として、ABCC の年報、ABCC と連携していた連合国最高司令官総司令部（General Headquarters, Supreme Commander for the Allied Powers : GHQ/SCAP 以下 GHQ）の公衆衛生福祉局（Public Health and Welfare Section : 以下 PHW）が発行した文書、ABCC 設立草創期に勤務していた医師および看護婦の証言から、ABCC 設立草創期の健康調査における医療職の活動の実際を明らかにした。

ABCC 設立草創期に行われた健康調査の中でも遺伝学調査は、1953（昭和 28）年の調査終了までに約 7 万 6 千人の子どもたちを対象とした最大の調査であった。遺伝学調査を発案した James. V. Neel（1990）は、遺伝学調査における重要な任務を果たした職種として、ABCC に勤務していた日本人医師、看護婦、自宅分娩を取り扱っていた助産婦を挙げている。申請者は、ABCC に勤務していた医師および看護婦の活動の実際から、遺伝学調査における乳幼児の家庭訪問の実際を明らかにした。遺伝学調査における助産婦の活動については、Lindee（1994）の研究から、ABCC が助産婦に指示した内容の一端を把握したが、その活動の全容は明らかではなかった。このため、助産婦はどのような経緯で ABCC に協力したのか、ABCC は遺伝学調査において助産婦にどのような任務を課したのか、その任務を果たすために助産婦は ABCC とどのように連携したのか、助産婦は妊産褥婦や家族、新生児とどのように関わったのか、その活動の実際について申請者が明らかにしたいと考えた。

## 2．研究の目的

本研究は原爆障害調査委員会（ABCC）が実施した遺伝学調査における ABCC と助産婦の連携の実際、妊産褥婦と新生児およびその家族に対する活動の実際を明らかにすることを目的とする。具体的には、1) 遺伝学調査において ABCC が日本の助産婦に課した任務、2) 助産婦は ABCC にどのような経緯で協力し、連携したのか、3) 遺伝学調査において助産婦は妊産褥婦と新生児およびその家族とどのように関わっていたのかという点について明らかにする。

## 3．研究の方法

本研究は歴史的事実を確認するために、文字資料と併せて遺伝学調査に協力した助産婦の面接調査を実施する予定であった。しかし、面接対象者の確保が困難であり、文字資料分析を中心に行った。

### 1) 研究デザイン

研究デザインは、歴史的研究である。歴史研究の手法は多岐にわたるが、本研究は東京大学教養学部歴史部会編集の史料学（2012）を参考に、過去の痕跡から史料を探索し、整理・保管したのち、正確な読解、解釈、すなわち事実を確定させるための史料批判を行った。歴史研究で用いる史料とは、当事者がその時々に残した手紙、文書、日記などを一次史料、第三者が記したそれらやのちの記録を二次史料とする。史料は、前者を後者より重視する。歴史研究で重要となる史料批判は、当事者の遺した史料を優先すること、出来事から時間的近接性の高い史料を優先すること、執筆者の信頼性をその利害関係と証言の一貫性の観点から慎重に吟味することが重要である。本研究は正確な史料の読解、解釈を行うため、上述した史料批判の視点に留意し、ABCC 公文書、ABCC 遺伝学調査に関わった ABCC 科学者の書簡などの一次史料を中心に用いた。

### 2) 本研究の対象時期

本研究では遺伝学調査における ABCC と助産婦の連携について考察することを目的の一つとしているため、ABCC が設立した 1947（昭和 22）年から遺伝学調査が終了した 1953（昭和 28）年までを対象時期とした。

### 3) 分析史料および史料収集場所

一次史料は William J schull Paper、William J schull Paper（Archives & Rare Book Collections for the TMC Library, McGovern Historical Center 所蔵）GHQ/SCAP records, PHW sheets : Daily Journal（国立国会図書館所蔵）ABCC の Annual Report（放射線影響研究所所蔵）を用いた。

### 4) 分析方法

分析方法は以下の手順で行った。初めに、研究目的を考慮して史料を収集した。次に資料保存、整理のために収集した史料の目録を作成した。収集した史料から、分析の視点に沿って「遺伝学調査」、「助産婦」、「連携」、「提案」、「調整内容」に関わる箇所を抽出した。史料批判の視点に留

意しながら、史料から抽出されたデータの読解、解釈を行った。その際、分析史料の正確な読解を行うため、適宜英文翻訳・校閲を行った。

#### 5) 倫理的配慮

本研究で使用する ABCC 文書等は図書館および施設等の許可を得てすでに出版・公表されている史料を使用するが、著作権を侵さないこと、史料に掲載されている対象者の人格や名誉を傷つけないよう十分配慮した。

#### 4. 研究成果

研究期間を通して、ABCC の公文書および科学者の書簡と助産婦側の公文書および私的書簡を探索したが、助産婦側の文書は著者が探索した限りでは見当たらなかった。このため、国立国会図書館および Archives & Rare Book Collections for the TMC Library, McGovern Historical Center で収集した ABCC の公文書および科学者の書簡を中心に下記の研究課題 1) ~ 3) について分析を行った。

##### 1) 遺伝学調査において ABCC が日本の助産婦に課した任務

1947 (昭和 22) 年 10 月 13 日の GHQ/SCAP/PHW 発刊の Daily Journal (以下 DJ) から、遺伝学調査において ABCC が日本の助産婦に課した任務は出産状況の正確な報告であったことが明らかとなった。報告方法は、1948 (昭和 23) 年 1 月 26 日の会議録から ABCC が作成した出産時の調査票に助産婦が記載し、毎月 5 日に ABCC に返却することであった。ABCC は助産婦の報告に謝礼を支払っており、通常の出産報告、異常の出産報告以外に決められた期限内に報告した場合や、出産した家庭に ABCC 検査員を連れて行った場合にも報酬が発生した。ABCC は助産婦に遺伝学調査の任務の理解を得るために、市町単位で少人数の会合を定期的に開催した。1948 (昭和 23) 年 7 月 15 日の会議録から、遺伝学調査に対する助産婦の理解を得ることは難しく、助産婦に入念な説明と教育が必要であったことが把握できた。ABCC は「長期にわたる正確な出生調査記録」を必要としており、助産婦に謝礼を支払うことで正確な記録の収集に努めたと考える。当時、日本の出産の約 90% が開業助産婦による自宅出産であり、助産婦による出産状況の報告は遺伝学的調査において重要な任務であったと考える。

##### 2) 助産婦は ABCC にどのような経緯で協力し、連携したのか、

1947 (昭和 22) 年 10 月 15 日の GHQ/SCAP/PHW 文書から日本看護婦助産婦保健婦協会助産婦部の石川いちに広島・長崎の助産婦から協力が得られるよう依頼文を送付したことが明らかとなった。同年 10 月 17 日の GHQ/SCAP/PHW 文書から、遺伝プログラムのために運営委員会が設立され、そのメンバーに市の助産婦会長も任命されていたことが把握できた。1948 (昭和 23) 年 3 月に遺伝調査が開始されるまで、ABCC と助産婦会は 3 回会合が行われていた。内容は遺伝学調査の方法、助産婦が ABCC に報告しなければならない内容についてであった。遺伝学調査において助産婦の協力は必要不可欠であり、研究を遂行するために ABCC 研究者から直接依頼を行い、連携していったことが把握できた。

遺伝学調査開始後の連携については、1951 (昭和 26) 年 2 月 21 日の ABCC 遺伝部の地区担当者から遺伝部の科学者である Dancan McDonald (以下 McDonald) 宛ての書簡 (Wright, 1951) から、遺伝学調査において ABCC では日常的に助産婦と連絡を取り合う様子や、ABCC の地区担当者が助産婦の地区会議に参加し、意見をくみ取っていたことが明らかとなった。また、意見交換については、ABCC 科学者が通訳を行ったこと、配布した書面は英文と和文に翻訳されたものであった。ABCC には日本の医療、社会、経済、政治情勢に精通していた翻訳・通訳課のスタッフが所属しており (ABCC, 1950)、日本の助産婦からの質問、提案事項にはこれら翻訳・通訳スタッフの協力を経て対応していたと考える。

##### 3) 遺伝学調査において助産婦は妊産褥婦と新生児およびその家族とどのように関わっていたのか

1951 (昭和 26) 年 2 月 21 日の ABCC 遺伝部の地区担当者から遺伝部の科学者である Dancan McDonald (以下 McDonald) 宛ての書簡 (Wright, 1951) に記された助産婦からの意見の中から、対象者や家族は ABCC の血液検査に対して同意を得ていないことに対し不満があることが明らかとなった。対象から同意を得ることについて、1947 (昭和 22) 年は、ナチス・ドイツの人体実験に関する判決が下され、国際的な倫理規範となったニュルンベルク綱領が示された年であり、ABCC 科学者は助産婦からの提案に同意を示した。会議録には助産婦が検査を受ける対象者や家族の気持ちに配慮した意見が散見され、助産婦は対象の思いを代弁する役割があったと考える。

上述したように ABCC 科学者は助産婦からの意見を含めた議論を持ち続けており、こうした背景には、助産婦の抱えている不満の提示や母親たちから聞いた声を聴く機会であったことが伺える。遺伝学プログラムの助産婦会への依存は計り知れず、助産婦会全体と綿密かつ親密な連携を維持することが必要不可欠であり、ABCC 科学者は遺伝学調査の目的を達成するため、助産婦が意見を述べやすい関係づくりや細やかな配慮を行い連携していたと考える。

今回、原爆障害調査委員会 (ABCC) が実施した遺伝学調査における ABCC と助産婦の連携の実際、妊産褥婦と新生児およびその家族に対する活動の実際を明らかにすることを目的としていたが、日本人助産婦の史料に限りがあった。このため、助産婦がどのような意図を持って ABCC

と連携したのかという助産婦側の詳細な分析に至らなかったことが本研究の限界である。しかし、会議録から助産婦が ABCC に対し母親の気持ちに配慮した提案を行っており、助産婦には母親を含む家族の意見を代弁する役割があったと考える。今後は当時の助産婦に関わる史料収集・分析を継続するとともに、遺伝学調査に参加した被験者の史料なども併せて、ABCC 科学者と助産婦の連携の実際について探求していく必要がある。

#### 引用文献

- Atomic Bomb Casualty Commission. Annual Report, Administration and General Service, Relationship with Occupation Forces, 1 January 1950 through 31 December 1950, GHQ/SCAP Records, PHW Sheets, PHW01725 (National Diet Library)
- James V. Neel: The very early years of the ABCC Genetics program, 1946-1951. RERF Update 2:6-9, 1990
- 木永勝也, 長崎女性史研究会: 聞き書き 藤田芳子の戦前・戦後: 大連での生活と長崎 ABCC のこと. 平和文化研究 33:73-101, 2012
- 三谷博. 東京大学教養学部歴史学部会編. 序論 読者に過去が届くまで. 史料学入門. 第4刷, 東京, 岩波書店, 2012, 1-11
- M. Susan Lindee. Suffering Made Real: American Science and the Survivors at Hiroshima. The University of Chicago Press, Chicago, 1994. 57-11
- 笹本征男. 米軍占領下の原爆調査 原爆加害国になった日本. 東京, 新幹社, 1995
- Wright TGA. William J. Schull, PhD Papers; MS 067 Box26 Folder 2 (McGovern Historical Center, Texas Medical Center Library). Suggestions made by Hiroshima midwives. 1951a; 21 (February)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Saori Funaki	4. 巻 11(2)
2. 論文標題 Collaboration between Atomic Bomb Casualty Commission (ABCC) scientists and midwives in the ABCC genetics survey: An examination of the 1951 ABCC minutes	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本放射線看護学会誌	6. 最初と最後の頁 33-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24680/rnsj.RJ-12001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 船木沙織，城丸瑞恵
2. 発表標題 原爆傷害調査委員会の遺伝学調査におけるABCC科学者と助産婦の連携の実際 ～1952（昭和27）年の遺伝学調査会議録に焦点を当てて～
3. 学会等名 日本看護歴史学会第37回学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Saori Funaki
2. 発表標題 Relationships between Atomic Bomb Casualty Commission (ABCC) researchers and Japanese midwives in the ABCC genetics research program
3. 学会等名 East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) 2021（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 船木沙織
2. 発表標題 遺伝学調査において原爆傷害調査委員会（ABCC）が日本の助産婦に課した 任務
3. 学会等名 日本看護研究学会第46回学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------